

一居間、食事、接客空間について

茨城大教育

荒川千恵子

目的および方法 第1報(日本家政学会第35回年次大会)に準ずる。なお本報では、L・DK型とLD・K型の規模評価、利用実態の比較および1階和室の利用と役割についての結果を報告する。なお、対象住宅のL、LDの床仕上げはすべてカーペット敷きである。

結果 ①. L、D、Kの組合せの選択においては、L・DK型では家事のしやすさ、接客を意識した理由が多く、LD・K型は日常的な家族の住まい方重視が多い。②. L、LDの規模評価は、L型では8畳レベルで不満率が5.5割、9畳以上になると3割に激減し、LD型では12畳レベルで不満率7割弱、13畳以上で4割である。③. 前報でのK、DKの規模評価を勘案すると、16畳規模を分割する場合、K4畳、LD12畳よりも、DK8畳、L8畳の方が規模不満は小さくなると言える。④. Lにおける起居様式は、L型は床座式が4割、LD型は2割であり、LD型におけるDスペースでの椅子式に伴なうレスペースでの椅子式の多さが、LD型のレスペース狭少感を増幅している。⑤. 接客空間は、L・DK型ではLへの集中度が高く、LD・K型ではLの他にDスペース、1階和室への分散利用がみられる。⑥. 1階和室は接客用としての利用が8割、寝室2割で、室規模が大きいと寝室化、小さいと客室化の傾向がみられるが、他の生活行為との重なりも多く、多様な使われ方をしている。⑦. 1階和室とLとの境界は、閉鎖型、開放型いずれの場合も7〜8割が満足し、不満な理由は、Lとつなげて広く、Lと4枚襖に、逆にLと壁仕切りをとおわれ方との関連からみても様々な住み方がみられ、各家庭の多様な住まい方が、1階和室によって吸収され、対応し得ている。